

「短期大学卒業生の学習・仕事・生活に関する調査」の基礎集計に基づく卒業生像

江木鶴子*¹, 吉田信夫*¹, 藤井美知子*¹, 堀田雅子*¹, 金子真理子*¹

千々松康*¹, 前出泰司*¹, 森山博教*¹, 中島信恵*¹, 伊藤一統*²

*¹宇部フロンティア大学短期大学部情報システム学科

*²宇部フロンティア大学短期大学部保育学科

An Image of Junior College Graduates on the Basis of a Fundamental Totalization Appeared in *A Survey on the Study, Jobs and Life of Junior College Graduates*.

Tsuruko EGI*¹, Nobuo YOSHIDA*¹, Michiko FUJII*¹, Masako HOTTA*¹,

Mariko KANEKO*¹, Yasushi CHIJIMATSU*¹, Taiji MAEDE*¹,

Hironori MORIYAMA*¹, Nobue NAKASHIMA*¹, Kazunori ITOH*²

(*¹Department of Information Systems, *²Department of Nursery Education, Ube Frontier College)

Abstract— In 2005 *A Survey on the Study, Jobs and Life of Junior College Graduates* was conducted among graduates at 15 junior colleges all over Japan, especially centered in Kyushu. The survey covered all the graduates that participated in this survey. All of the graduates had already spent from 2 to 8 years after their graduation. The number of valid collections was 2,835, and the collection rate was 23.8%.

At Ube Frontier College, both the Department of Information Systems and the Department of Nursery Education participated in this survey. We mailed 600 surveys to our graduates asking them 46 questions concerning their present jobs, their life during junior college days, and their life since graduating. We collected 107 collections, and the collection rate was 17.8%. This paper mainly deals with the summary of the survey carried out at these two departments at Ube Frontier College.

We must mention that this survey was carried out with the subsidiary of Grants-in-Aid for Scientific Research [Fundamental Research(B)(I)]. The research title is *A Study of the First-Stage Theory of Career Formation of Junior College Graduates*.

Key Word—junior college graduates, Ube Frontier College, a life during college, a life since graduating.

1. はじめに

短期大学基準協会に組織された調査研究委員会とその協力校である九州地域の9短期大学関係者らで発足した研究グループが、2004年に「短期大学卒業生の進路・キャリア形成と短大評価」に関して調査研究を実施している⁽¹⁾。この調査を基礎に、2005年に全国15短期大学（北海道1，関西2，中四国2，九州10）の卒業生へ「短期大学卒業生の学習・仕事・生活に関する調査」（以後，本調査）を実施し，短期大学卒業生のキャ

リア形成に関する研究が続けられている⁽²⁾。

宇部フロンティア大学短期大学部（以後，本学）は，情報システム学科（以後，情報）と保育学科（以下，保育）がこの調査に参加した。本論では，これらの調査のうち本学に関する概要をまとめ，本学の情報と保育の両学科卒業生のキャリア形成の違いや類似点を明らかにする。

2. 調査方法

2.1 調査概要

2.1.1 調査実施時期

本調査は、2005年6月から12月にかけて全国15短期大学で実施された。

2.1.2 調査対象者

調査対象は、全国15短期大学の卒業後1年、3年、7年を経過した卒業生全員で、有効回収数は2,835名、有効回収率は23.3%であった。

2.1.3 調査方法

調査用紙送付に先立ち、調査対象者全員に調査依頼と住所確認のハガキを出した。その後、住所不明者を除いた卒業生へ調査用紙を送付した。さらに、調査締め切りを過ぎた時期に、調査書未提出者へ督促のハガキを出し、再度調査を依頼した。この手順は、調査を実施した15短期大学の統一した調査方法として執られた方法である。

2.1.4 調査項目

調査項目は9項目に分類された46種類の質問からなる。調査項目と質問を表1に示す。調査項目は、短期大学で受けた教育と卒業後のキャリア形成との関連を調査する内容となっている。

表1.「短期大学卒業生の学習・仕事・生活に関する調査」質問項目

項目	番号	質問内容
A		本学の入学方法と時期についてうかがいます。
	A 1	(1) 高校を卒業したのはいつでしたか。 (2) 本学に入学したのはいつでしたか。
	A 2	本学への入学方法について、1つだけ○を付けてください。
B		本学への入学から卒業までのことについてうかがいます。
	B 1	本学へ進学を決めた頃のことについてうかがいます。 (1) あなたが本学へ進学した理由は何ですか。 (2) 本学へ進学を決める前に、「短期大学」以外の学校へ進学を考えたことがありましたか。 (3) どんな種類の学校ですか。 (4) 短期大学を選んだ決め手となった理由は何ですか。
	B 2	(1) 在学中、あなたは以下の活動にどのくらい力を注いでいましたか。(a～i) (2) 上のa～iの活動の中で、あなたがもっとも力を注いでいたものは何ですか。
	B 3	在学中の一週間は、どのように過ごしていましたか。学習やアルバイトなどの時間を教えてください。 (1) 授業期間中の平均的な1週間を思い出してください。 (2) 時期休業期間中の平均的な1週間ではどうですか。
	B 4	本学での教育を振り返ってみて、以下の学習や生活に必要な項目は、 (1) 充実していましたか、また (2) あなたはどの程度満足でしたか。
	B 5	入学前にいだいていた本学への期待に対して、入学後にあなたはどのように感じていましたか。
	B 6	あなたが在学中の学習成果について、単位数や学業成績の面ではどうでしたか。

	B 7	あなたは本学在学中、正規の授業や実習とは別に、何か講座を受けたり他の学校等に通ったりしましたか。
	B 8	在学中に何らかの仕事の経験がありますか。また、その経験は、短期大学での学習内容と、どの程度関係がありましたか。 (1) 経験の有無 (2) 学習内容と仕事の経験は、どの程度関係がありましたか。
	B 9	在学中の学費・生活費は誰が負担しましたか。
C	C 1	あなたは短大卒業後、仕事をした経験がありますか。
	C 2	卒業の前後に、どのような就職活動をしましたか。
	C 3	あなたの卒業直後の進路について、次の中から1つ選んで○を付けてください。
	C 4	前のC 3で、1, 2, 3のいずれかを選び、就職したと答えた方のみお答えください。あなたが採用されたときに、採用する側にとって次のような項目はどの程度重要だったと思いますか。あなたの印象でお答え下さい。
	C 5	C 3で1, 2, 3のいずれかを選び、就職したと答えた方のみお答え下さい。卒業直後のあなたの職業は何ですか。
	C 6	C 3で1, 2, 3のいずれかを選び、就職したと答えた方のみお答え下さい。いま、その最初の就職先で仕事を続けていますか、それとも退職しましたか。退職している場合には、退職した時期をお書きください。
	C 7	C 3で4, 5, 6のいずれかを選び、卒業直後に進学したと答えた方のみお答え下さい。本学を卒業直後に進学(編入学、専攻科進学、科目等履修などを含む)した方は、進学の時期や専攻の内容、終了の状況を下の表にそってお答えください。
	C 8	C 3で4, 5, 6のいずれかを選び、卒業直後に進学したと答えた方のみお答え下さい。 (1) 進学した理由(ひとつだけ○をつけてください) (2) 進学先で学んだ結果を全体を通してみると、あなたはどの程度満足していますか。 (3) 進学してからの勉強など、次の各項目に対して、あなたはどの程度満足していますか。
	C 9	C 3で7, 8, 9, 10のいずれかを選び、卒業直後に進学したと答えた方のみお答え下さい。進学の正規の就職もしなかった方におたずねします。なぜ進学も就職もしなかったのですか。
D		現在の仕事や活動についてうかがいます。
	D 1	あなたの現在の状況についてお答え下さい。
	D 2	あなたの現在の仕事についてうかがいます(現在仕事をしていない場合は、以下のD 2からE 4までの設問では「いちばん最後についていた仕事」について答えて下さい)。 (1) あなたの職業は何ですか。 (2) 1ヶ月の収入はどのくらいですか。 (3) 週平均の労働時間はどれくらいですか。
	D 3	現在の仕事について、最初にどのくらいの期間、企業・施設での教育訓練(講座等への派遣なども含めて)を受けましたか。
	D 4	本学を卒業後、これまでにいくつの企業・施設等で働きましたか。
E		短大教育と仕事との関係についてうかがいます。
	E 1	あなたの短大卒業後最初についた仕事と、現在(あるいは一番最近)の仕事を考えてみた場合、短大在学中に獲得した知識や技能がどのくらい役立ちましたか、また役立っていますか。
	E 2	次のような知識・能力・技能を(A)短大卒業までにどの程度身に付けましたか。また、(B)現在(または一番最近)の職場で、それらの能力はどの程度必要とされていますか。また必要とされていたか。
	E 3	短大卒業直後の仕事と、現在(あるいは一番最近)の仕事について、仕事環境(地位、職名、収入、職務など)を全体として考えてみて、次の質問に答えてください。 (1) あなたの仕事は、あなたの学歴にどの程度ふさわしいものですか。 (2) それぞれの仕事で、もっともふさわしい学歴はどれくらいだと思いますか。

		(3) それぞれの仕事に、もっともふさわしい専門分野(学科)はどれだと思いますか。
	E 4	現在ついている仕事を十分こなすため(一人前とみなされるため)には、短大卒業後、どのくらいの期間の経験が必要だと思いますか。
F		仕事への態度や職業上の満足度についてうかがいます。
	F 1	全体として、あなたはどの程度現在の仕事に満足していますか。
	F 2	仕事に対するあなたの評価を、以下に示すさまざまな側面からお答えください。なお、現在仕事に就いていない方は、一番最近までついていた仕事についてお答えください。 (1) あなたはそれらをどの程度重視していますか。 (2) 現在の仕事は、それぞれの項目に、どの程度あてはまりますか。
G		短大卒業後(卒業直後を除く)の高等教育機関他での学習経験や生涯学習等についてうかがいます。
	G 1	短大卒業後、仕事をするなどして、しばらく期間をおいて、あらためて教育訓練を受けたことがありますか。
	G 2	あなたは、次のような観点からみて、今後、教育訓練を受けたり、学習したりする必要があると思いますか。
	G 3	上の質問のような点から教育訓練や学習が必要となった場合、あなたはどのような機関で学びたいと思いますか。
	G 4	今後、教育訓練を受けたり学習したりする場合に、次のようなことは障害になっていると思いますか。
	G 5	短大卒業後、次の項目は、卒業生にとってどの程度必要だと思いますか。
H		あなたご自身についてうかがいます。
	H 1	性別
	H 2	生年月日
	H 3	短大卒業の直前と現在のそれぞれの時期で、あなたは誰と一緒に住んでいますか、住んでいましたか。
	H 4	現在、お子さんはいらっしゃいますか。
	H 5	以下、それぞれの時期のお住まいの場所についておうかがいします。
	H 6	あなたは、普段の生活で、次のような行動を積極的にしていますか。
	H 7	女性の生き方について次の中から、あなたの考え(男性の場合は、あなたが配偶者に求める生き方)に最も近いものに○をつけてください。
	H 8	あなたが、いま人生において最も重視していることは何ですか。
I		ご自分の短大での学習経験を振り返って
	I 1	短大で学んだことはどの程度役立っていますか。
	I 2	もし、あなたが今18歳で、もう一度高校卒業後の進路選択ができるとすれば、あなたはどうしますか。
	I 3	ご自身の経験を振り返って短大教育は今後どうあるべきかについて、何でもご自由にお書きください。

2.2 本学に関する調査概要

本学の調査に関する概要をまとめたものが表2である。調査対象者600人に対し107人から調査票が回収され、回収率は17.8%であった。これはこの調査全体の回収率23.3%に比べ非常に低い。学科別にみると、保育が15.9%であったのに対し、情報は23.6%で、15校全体の回収率とほぼ同じであった。回収率を卒業年で比較すると卒業後7年経過の回収率が最も高く20.5%、次が卒業後1年経過の17.2%で、最低率は卒業後3年経過の15.6%であった。保育の回収率はこれと同じ順であるが、情報は卒業後7年経過の回収率が

表2. 宇部フロンティア大学短期大学部調査概要

学校名	卒業年	学科名	卒業者数	調査票発送 対象者数	回収数	回収率 (%)
宇部短期大学	1998年	情報計数学科	55	50	14	28.0
		保育学科	168	155	28	18.1
宇部フロンティア大学短期大学部	2002年	情報システム学科	48	44	11	25.0
		保育学科	152	148	19	12.8
宇部フロンティア大学短期大学部	2004年	情報システム学科	64	54	10	18.5
		保育学科	149	149	25	16.8
合 計			636	600	107	17.8

28.0%で最も高く、その後卒業年が近いほど回収率は低くなっている。

2.3 分析方法

分析方法は、まずすべての質問に対する回答を質問毎に集計し、それらを大まかに①本学入学から卒業まで、②進路決定時と卒業直後の仕事に関して、③卒業後の仕事と短大教育との関連に関して、④卒業生の現在に関しての4つにまとめた。その後、これらの結果から情報の卒業生像、保育の卒業生像をそれぞれ表し、最終的に学科の違いに重点を置き分析した。

保育と情報は短期大学の教育分野としては異なった特徴をもつ。保育は、保育者養成という明確な枠組みと進路を持った教育分野であり、短期大学が高等教育機関として担ってきた代表的な分野である。保育の卒業生の進路は養成された専門分野に向かうという点で栄養士や福祉系の養成課程と似た側面をもつ。それに対して情報は、教育内容は統一されておらず個々の教育機関が独自の方針で実施しており、卒業生の進路は現代社会の多方面に亘る分野である。時代背景から類推すると初期の家政系の学科と似た側面を持っている。短期大学はこの両方を包含する高等教育機関であるため、短期大学の評価をする際には必要な分析軸である。

3. 結果および考察

以下では、それぞれの質問に対する回答の集計結果を示し、保育と情報の違いに重点を置き考察する。なお、分析結果の図に付けたキャプションは、表1に示す項目番号：質問内容の形式とした。

3.1 入学から卒業までにに関する分析

3.1.1 質問A：入学方法に関する分析

回答者の入学方法は、推薦入試によるもの(指定校推薦52.4%、一般推薦21.9%)が約4分の3を占めている。推薦入試の占める割合を学科別にみると、情報

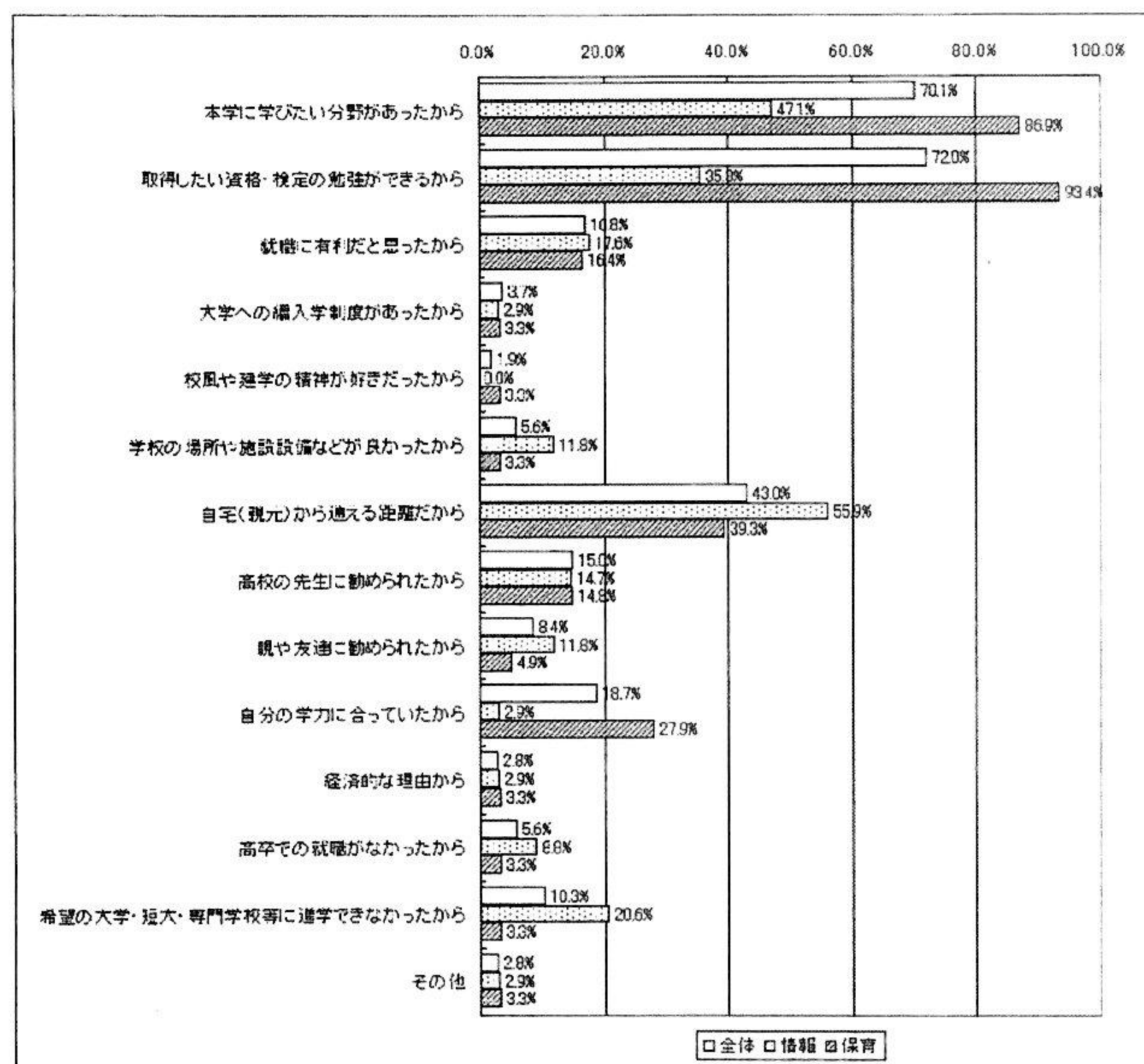


図1 B1(1): 本学へ進学した理由

が61.8%, 保育が78.3%である。

3.1.2 質問B: 入学から卒業までにに関する分析

受験した理由は、取得したい資格・検定の勉強ができるからが最も高く72.0%を占め、次に本学に学びたい分野があったからが70.1%を占める。しかし、学科別にみると、情報は自宅から通えることを理由に挙げた人が最も多く(55.9%), 次に本学に学びたい分野があったからは47.1%である。これに対して保育は、取得したい資格・検定の勉強ができるからが最も高く(93.4%), 次に本学に学びたい分野があったからが86.9%で、ほとんどの卒業生がこの2つを理由に挙げている。情報の卒業生の20.6%が、希望の大学・短大・専門学校に進学できなかったことを挙げている点と、保育の27.9%が自分の学力にあったからと答えた点が特徴的である(図1)。

短大を最終的に選択した理由は、3つ挙げられる。ひとつは資格取得や検定合格に有利だったこと(29.5%), 希望していた学校に進学できなかったこと(29.5%), 最後が親元から通える(21.3%)というものである。4年制大学より早く社会に出られる(19.7%), 就職に有利(16.4%), 専門学校より教養を身に付けられる(16.4%)と答えた割合がこれに続く。学科別では、保育は資格取得や検定合格に有利という積極的な理由が最も高く32.3%を占めるのに対して、情報は希望していた学校に進学できなかったという消極的な理由を挙げた割合が31.8%と最も高い(図2)。

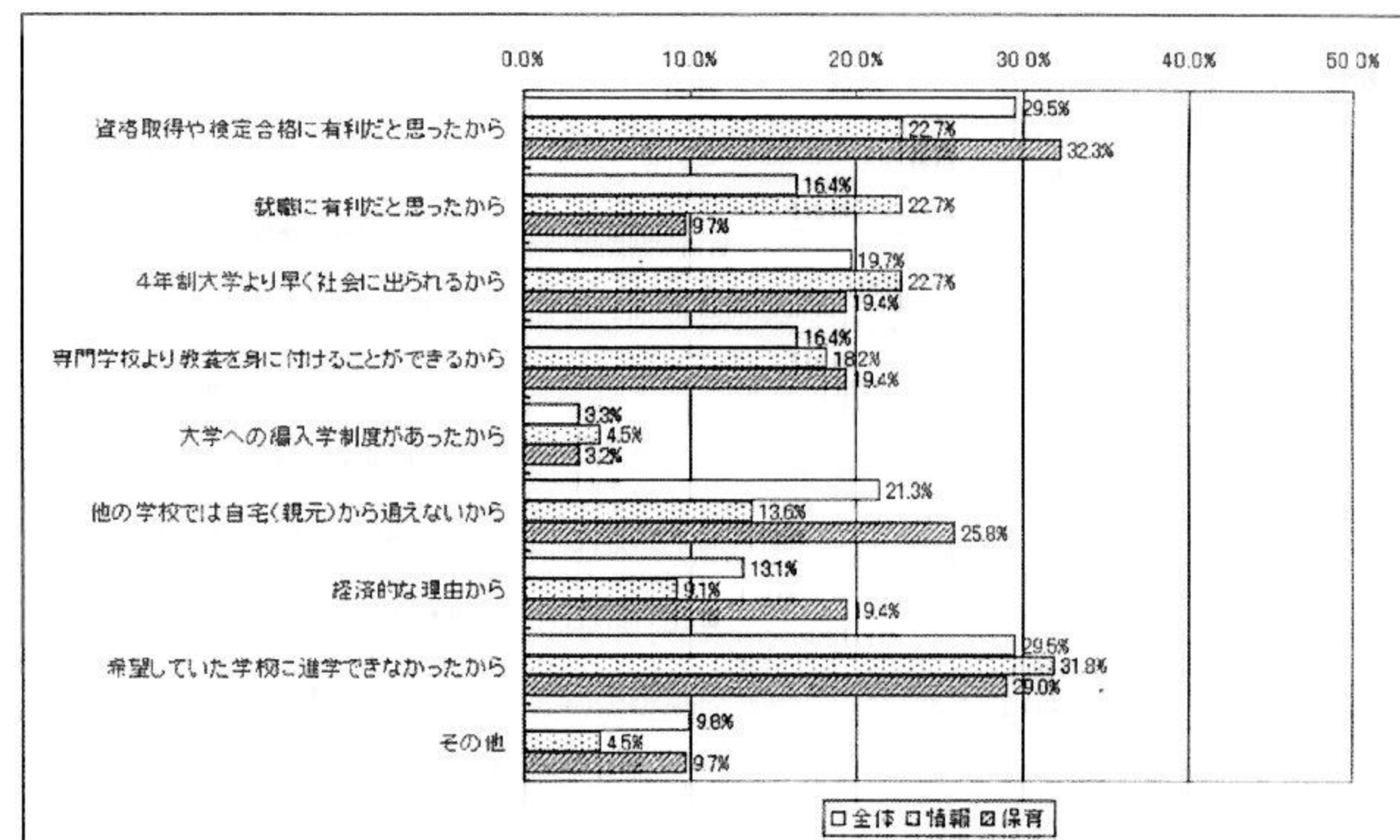


図2 B1(4): 短期大学を選んだ決め手となった理由

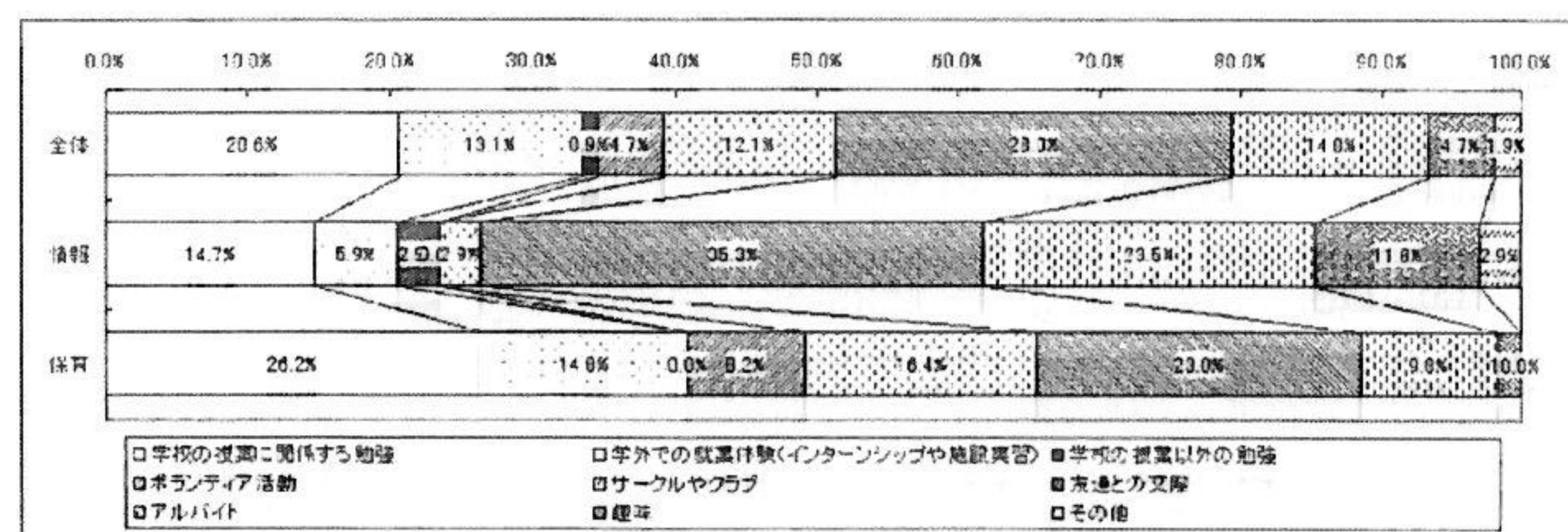


図3 B2(2): 在学中にもっとも力を注いでいたもの

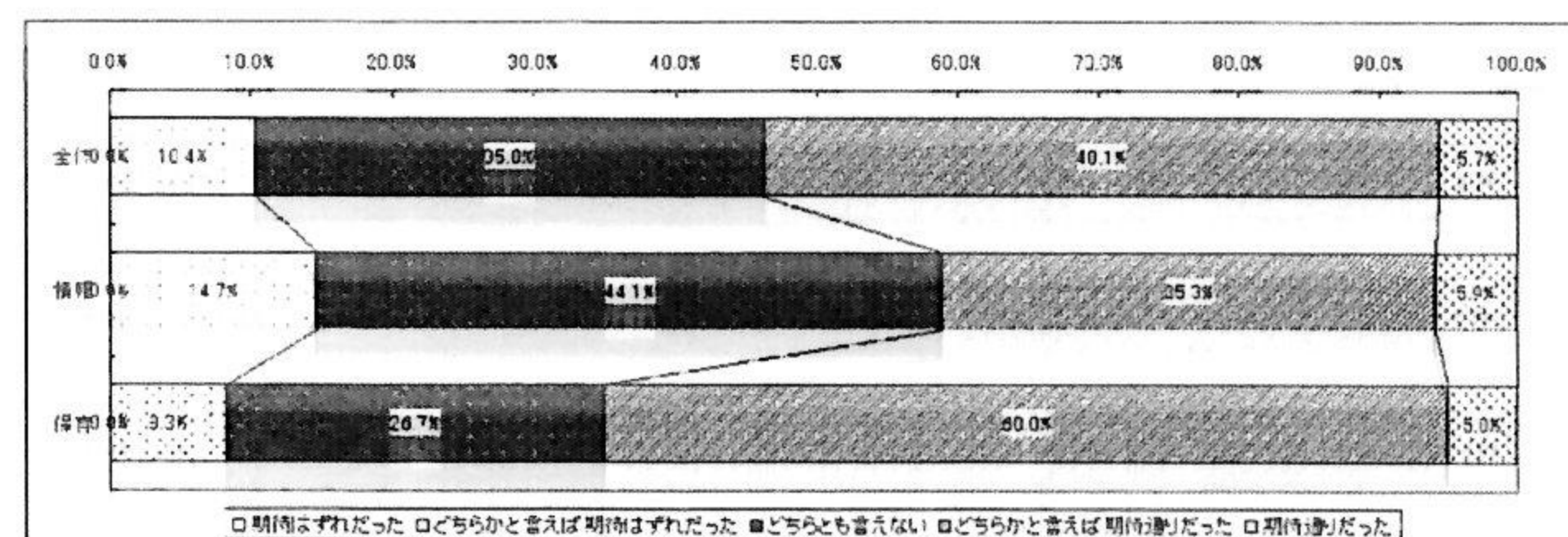


図4 B5: 入学前の期待に対する入学後の感想

在学中に最も重点を置いたことは、全体では友人との交際が最も高く28.0%を占め、学業と答えた割合20.0%より高い。これは卒業後3年、7年がこの傾向を示し、卒業後1年の学生は友人より学業と答えた割合が非常に高く特徴的である。学科別にみると、情報は友人とアルバイトを最も重視と答えた割合が58.8%を占め学業と答えた割合は14.7%である。これに対して保育は学業と答えた割合が26.2%を占め、友人やアルバイトが32.8%である(図3)。

入学前の期待に対しての現在の評価は、ほぼ期待通りだったと答えた割合は情報が41.2%であるが、保育は65.0%で高い。情報はどちらともいえないと答えた割合が最も多く44.1%ある。どちらかといえば期待はずれだったと答えた割合が情報では14.7%, 保育8.3%であった。しかし、全く期待はずれだったと答えた卒業生は両学科ともいなかった(図4)。

多くの卒業生が、自分は平均程度の単位数をとり、中程度の成績だったと答えている。在学中に仕事の経

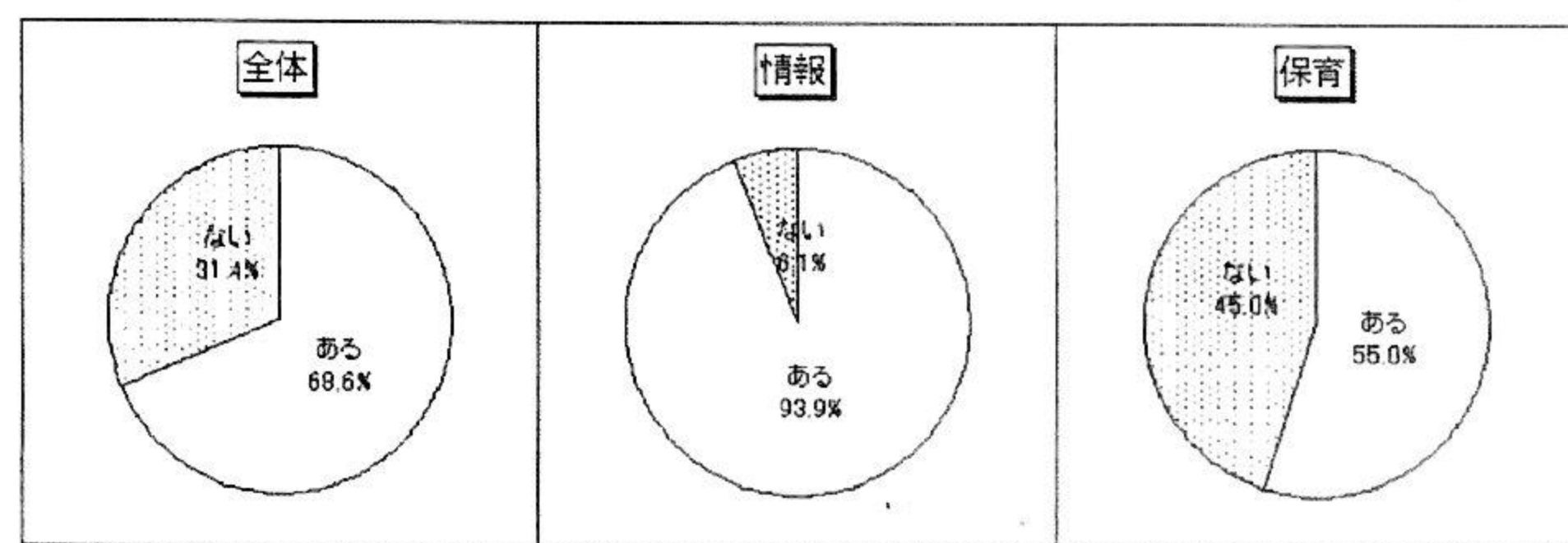


図5 B8(1)：在学中の仕事経験の有無

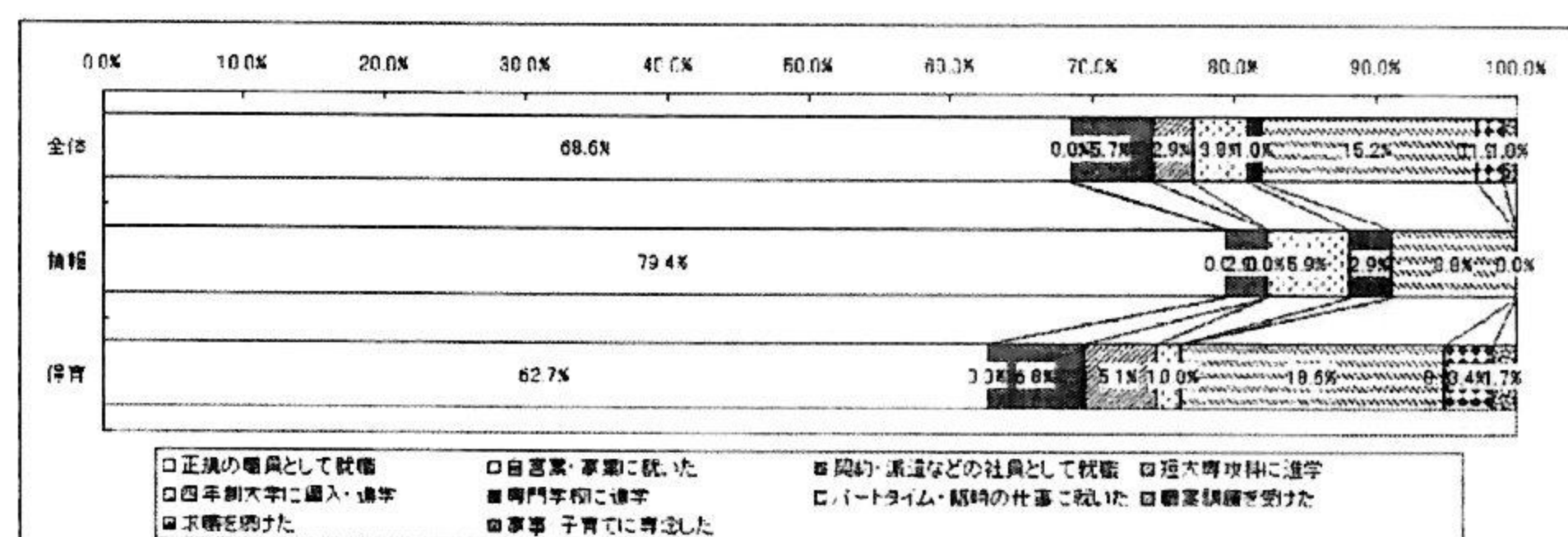


図6 C3：卒業後の進路

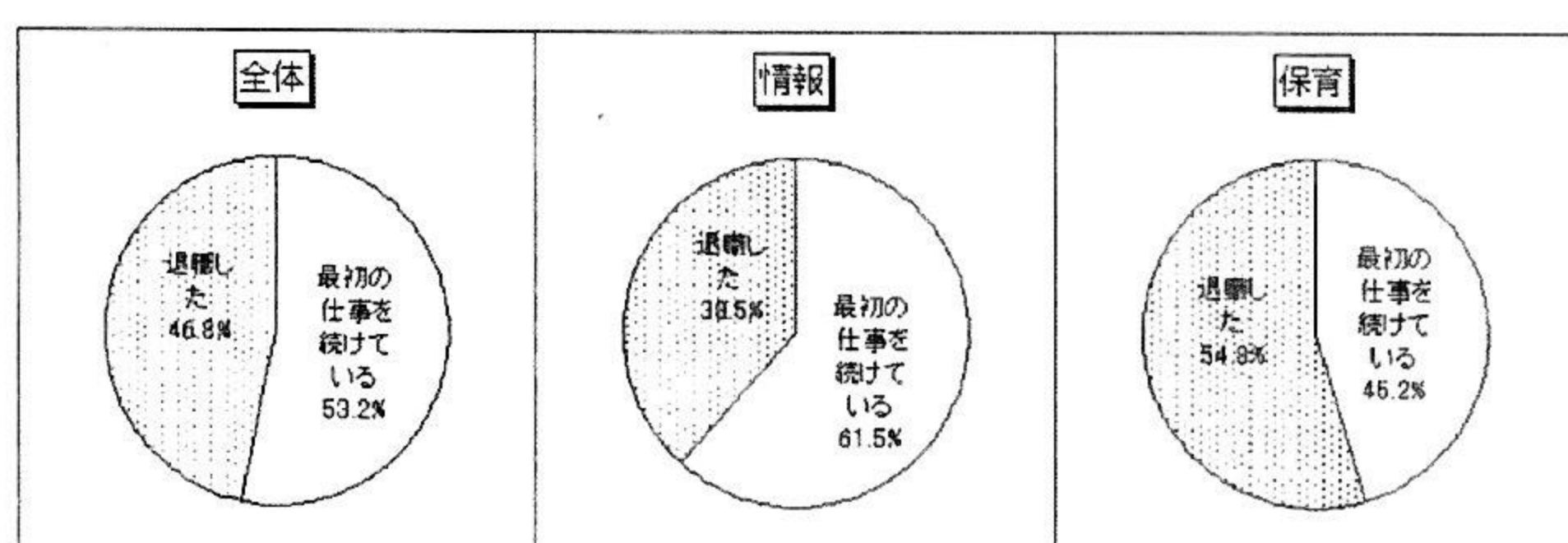


図7 C6：最初の仕事先で仕事を続けていますか

験をしたと答えた卒業生は、情報では93.9%でほとんどの卒業生が経験しているのに対して、保育は55.0%で約半数に留まっている(図5)。就業経験をした情報の卒業生のうち61.0%は学業と関連のない仕事と答えているが残りの卒業生は何らかの関係があったと答えている。

学費の負担は、全額を家族や親戚が負担したと答えた割合が最も高く、全体で71.0%である。しかしこの割合は、近年になるほど下がり、卒業後1年の卒業生は51.6%に留まっており、就学する学生も何らかの財政的な負担を強いられていることが窺える。

3.2 進路決定時と卒業直後の仕事に関する分析

就職経験は、全体の95.3%が経験ありと答えており、その割合は卒業後7年、卒業後3年、卒業後1年と少しずつ下がっている。全体では、87.8%が卒業直後に就職しており、その割合は保育が94.7%、情報は84.9%である。

就職に関する情報をどこから得たかについては、就職課からの情報を利用した卒業生が最も高く、両学科ともその率は6割を超えており、就職課機能の重要性が明確である。次に多いのが保育では教員からが39.3

%, 情報では求人情報誌やインターネットの利用が38.2%である。

卒業直後、正規の職員として就職した率は、情報が79.4%, 保育は62.7%である。それに反比例する形で、パートや職業訓練などで求職を続けた割合が、情報が8.8%に対して保育は22.0%と高い(図6)。

就職するに際して最も重要な要素として短大を卒業していることと答えた割合は、保育は73.2%であるのに対して情報は46.4%で、保育の方が圧倒的に高い。取得した資格が重要と答えた割合は、全体で62.0%であるが、これも保育が76.2%, 情報32.1%で保育が高い。コンピュータの技能と回答した割合は、情報が71.4%であるのに対して、保育の58.5%が全く重要でないと答えている。

就職先の職種に関して、保育の80.0%が幼稚園、保育所、施設などの専門職に就いているのに対して、情報は一般事務、会計事務、医療事務をあわせて60.9%で、情報専門技術者は7.2%である。特に情報の卒業生は、アンケートに示された98種の職種のうち14種に就いたという回答があり、保育の7種と比べて選択した職業の幅が非常に広いのが特徴である。また、現在最初の職業を続けていると答えたのは全体で53.2%、約半数弱はすでに退職していたが、情報は61.5%が最初の職業を持続しており、保育の持続は45.2%に留まっている(図7)。

卒業後進学した人は、保育のほとんどが本学短大専攻科か本学大学への進学であるのに対して、情報はほとんどが他大学で、進学先も経済学系、理学系、工学系など多方面である。進学の理由として、情報の進学者の66.7%は、さらに勉強したかったと答えており、将来の仕事のためとは多くの人が答えていない。それに対して、保育からの進学者の内、さらに勉強したかったと答えた割合は、将来の仕事のためと答えた割合と同じ40.0%である。進学後の結果としては概ね満足している。その理由は、高い技術や技能教育(77.9%), 希望の職種につけたこと(62.5%)などである。

進学も就職もしなかった理由を、情報の対象者の半数は、就職や進学以外にやりたいことがあったと答えているのに対して、保育では労働環境や就職条件などの理由が挙げられており、他にやりたいことがあったと答えた卒業生はいなかった。

3.3 卒業後の仕事と短大教育との関連に関する分析

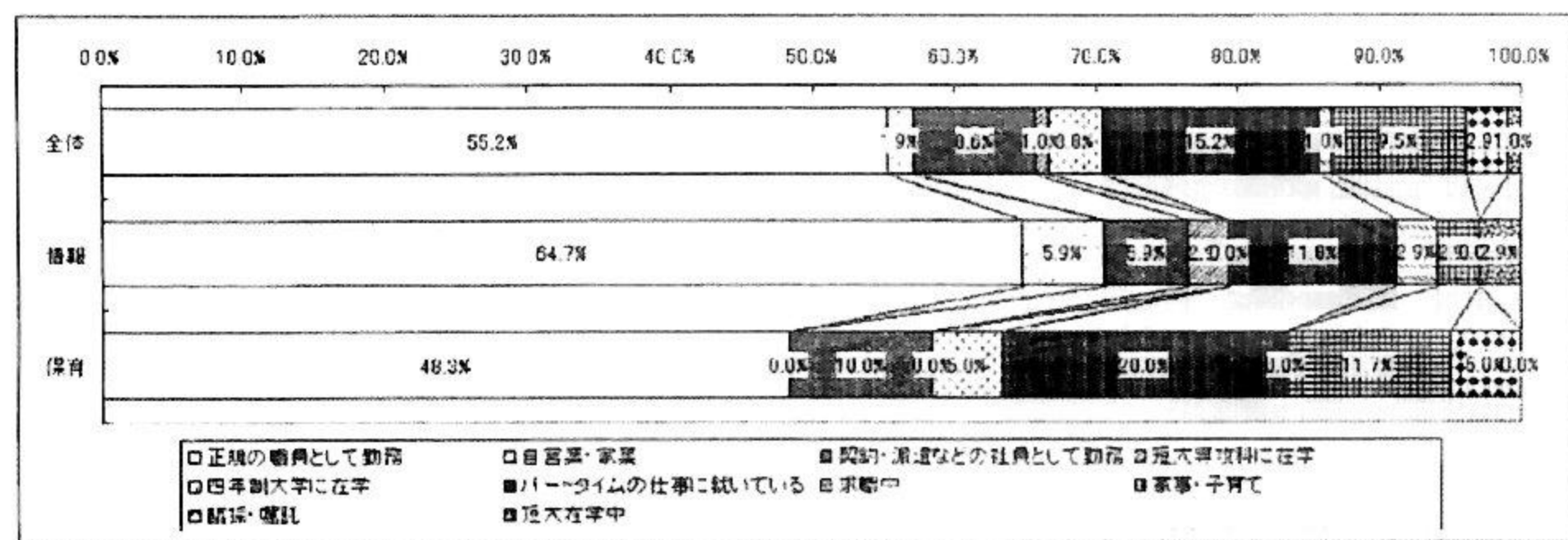


図8 E1：現在の仕事状況

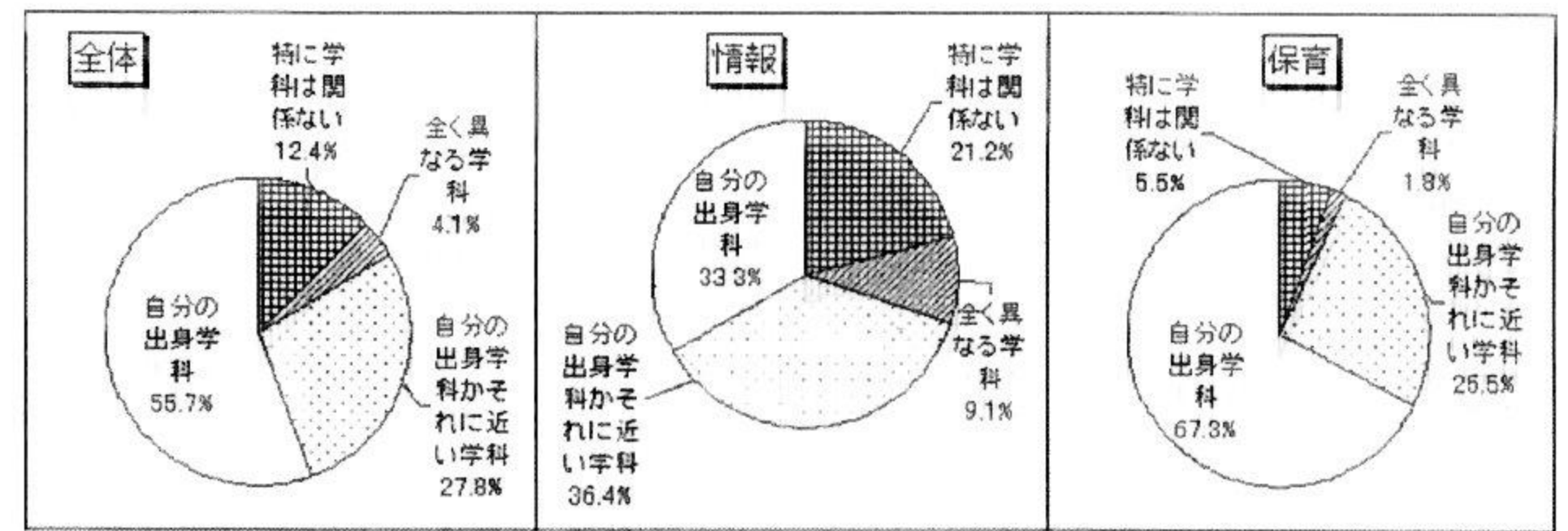


図11 E3(3)：仕事にふさわしい専門分野は（最初の仕事）

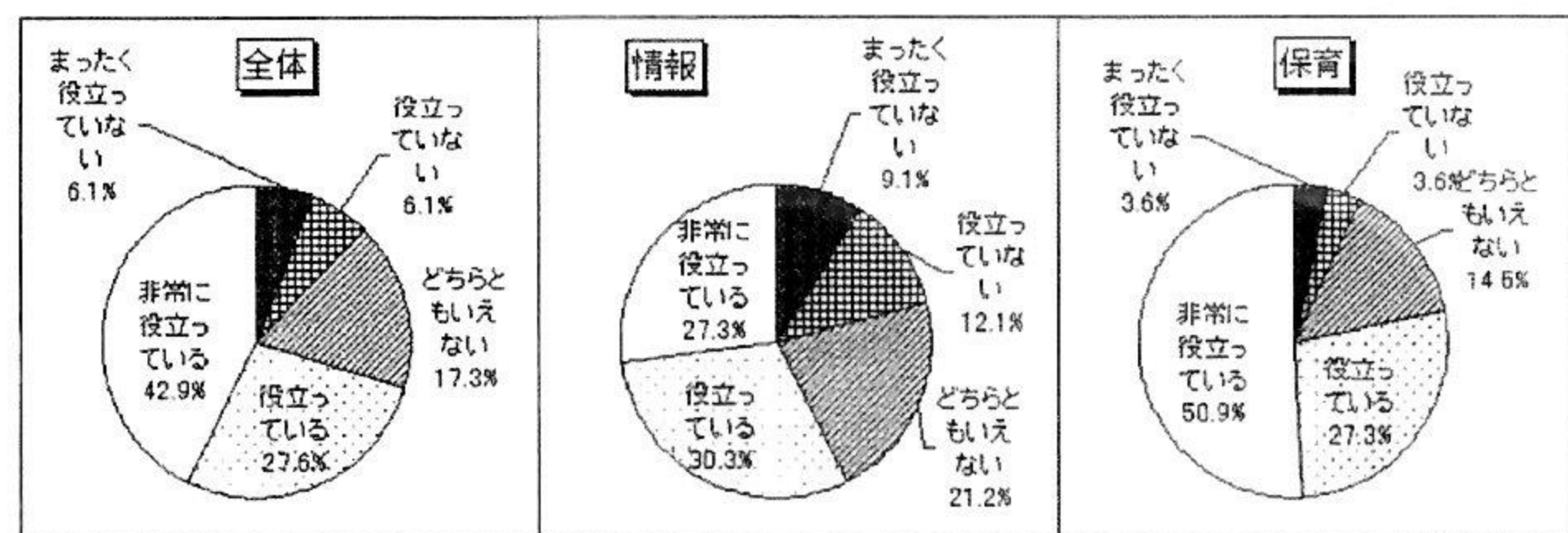


図9 E2：短大で獲得した知識・技能の役立度

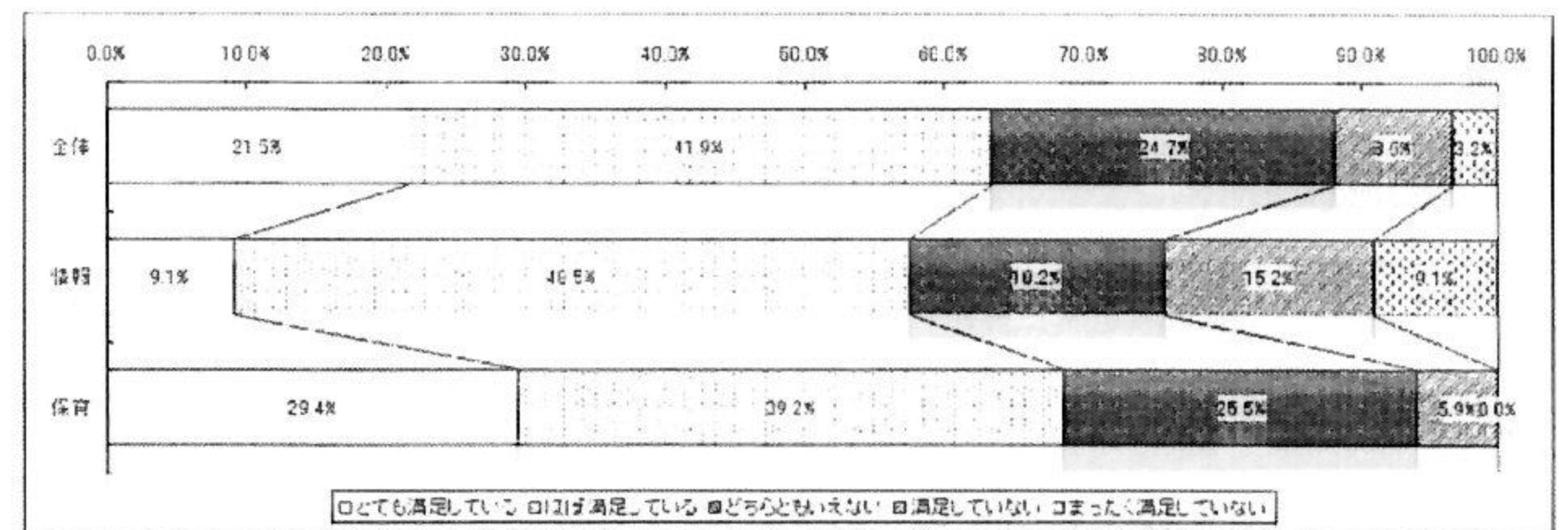


図12 F1：現在の仕事の満足度

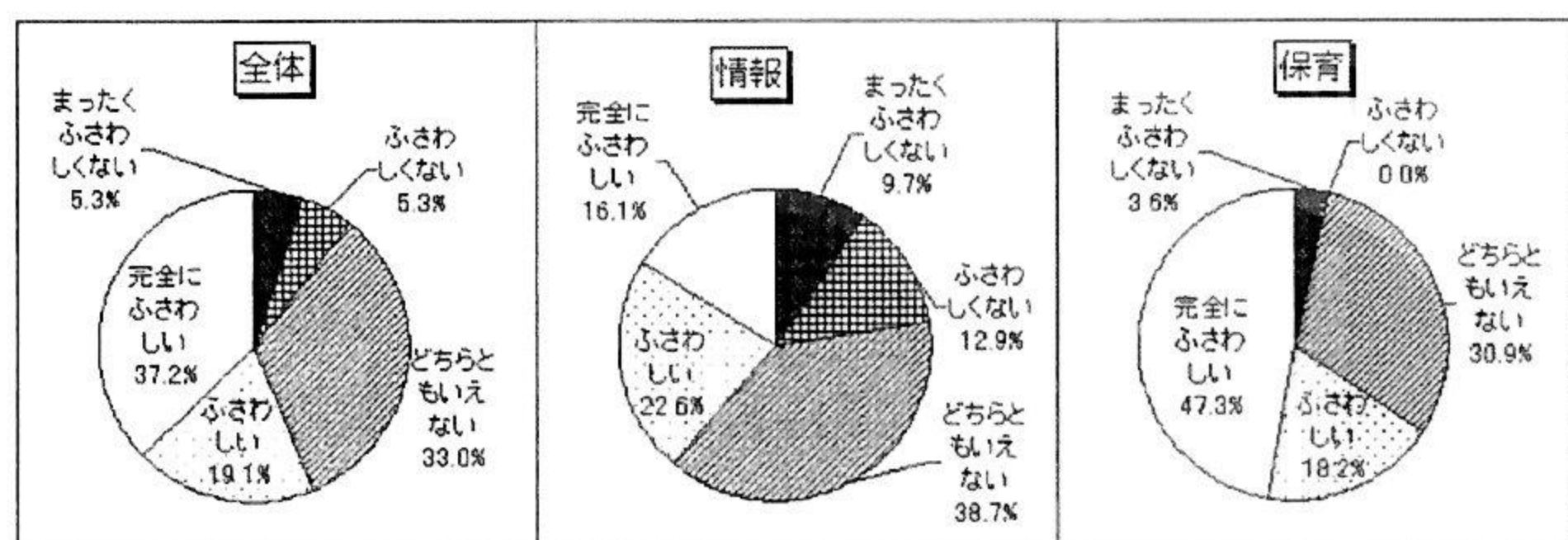


図10 E3(2)：学歴にどの程度ふさわしいか（現在の仕事）

3.3.1 質問D：現在の仕事や活動に関する分析

現在の職業に関しても前節の卒業直後の職業とほぼ同じ傾向があり、情報の正規職員としての就職は、保育より約3割強高い（図8）。

現在の職種に関して、情報の卒業生は60%が事務系の職業に就いており、情報処理技術者は5.7%で他のサービスの職業とほぼ同率である。それに対し、保育はおよそ80%が保育士、介護福祉士、また幼稚園教諭として、人と係わる職業に就いている。その内、幼稚園教諭は5.4%であり、保育所の保育士は57.1%で、およそ60%を占める。1ヶ月の収入は、全体的には15万円が最も多く34%を占め、最高30万円から10万円までに分布し、平均を計算してもちょうど15万円となる。学科別にみてもほぼ同様である。週平均の労働時間は、5時間刻みの調査で、全体的には、やはり40時間をもっとも多く30.3%で、40時間以上に78.8%、およそ80%が分布している。このことから回答者の約80%がフルタイムスタッフであることが推定される。学科別にみると、情報は60時間以上におよそ15%の回答があり、保育より10%以上高い率である。

教育訓練の調査は、期間が0, 1, 3, 6, 9ヶ月で採られているが、全体的に観て、9ヶ月に1%, 6

ヶ月に5.2%の回答があるが、最高は0ヶ月で、半分以上の54.6%である。後は1ヶ月, 3ヶ月がそれぞれ23.7%, 15.5%である。学科別では、情報は0ヶ月が44.1%で、1ヶ月と3ヶ月が23.5%, 6ヶ月が8.8%である。それに対し保育は0ヶ月が57.4%, 1ヶ月, 6ヶ月がそれぞれ27.8%, 9.3%であり、両学科とも6ヶ月が10%近くを占め注目される。

これまで働いた企業・施設数は、現職を含めて1, 2, 3, 4, 6社（施設）で調査が採られており、1社が最高で51.0%, 2社が26.0%, 3社が10.0%, 4社が9.0%, 6社は1.0%である。この項目については、両学科の傾向に差異が少ないが、情報は1社が54.4%, 2社が21.2%であるのに対し、保育は1施設が45.6%, 2施設が29.8%である。およそ半分が現職を含めて1社、または1施設で頑張っているという回答結果である。

3.3.2 質問E：短大教育と仕事との関係に関する分析

短大教育を受けたことが卒業後の仕事に役立ったかの質問に対し、「非常に役に立った」、「役立った」という肯定的回答が7割を超える。しかし、情報と保育との比較では、大きな差が見られる。「非常に役に立った」と「役立った」を合わせると、卒業後最初の仕事においては情報57.6%, 保育78.2%で（図9）、現在の仕事においては情報46.9%, 保育80.0%である。この違いは学科のカリキュラム構成と職業との関連を反映した数字だといえよう。

短大教育で学んだことに関する質問で、「非常に身に

ついた」と「身についた」が「まったく身につかなかった」と「身につかなかった」よりも上回っている項目は、14項目中「幅広い知識・教養」、「専門的な知識・技能」、「コンピュータを使いこなす技能」、「チームの中で仕事を遂行する能力」、「仕事への適応能力」、「創造性」、「自発性・自主性」、「コミュニケーション能力」、「礼儀・マナー」の9項目である。その中で「専門的な知識・技能」、「チームの中で仕事を遂行する能力」、「コミュニケーション能力」そして「礼儀・マナー」に関しては肯定的回答が否定的回答よりかなり上回っており、これら4項目については短大教育の中でかなり身についたと感じていると判断して良い。しかし、これらの肯定的回答の中で、「非常に身についた」と答えている割合が少ないことを考えれば、肯定的な回答であるからといって高く評価することはできない。

逆に身につかなかったと感じている項目は「外国語の能力」、「問題解決能力」そして「リーダーシップを発揮できる力量」の3項目である。身についたとも身につかなかったとも判断が難しい項目は「ひとりで仕事をこなせる力」と「人との交渉能力・折衝能力」の2つである。

学科間で差が目立つ項目は「専門的な知識・技能」、「人との交渉能力・折衝能力」そして「コンピュータを使いこなす技能」である。前者2項目は保育が、後者は当然情報の卒業生が「身についた」と答えている割合が高い。

以上から、概して言えば「短大教育は役に立った」と感じている人が多いといえよう。

現在の職場で求められている項目については、「非常に求められている」と「求められている」の合計が「全く求められていない」と「求められていない」の合計をはるかに上回ってほぼ8割程度に達している項目は、「幅広い知識・教養」、「専門的な知識・技能」、「ひとりで仕事をこなせる力」、「チームの中で仕事を遂行する能力」、「仕事への適応力」、「自発性・自主性」、「コミュニケーション能力」そして「礼儀・マナー」の8項目である。次に求められている能力は「コンピュータを使いこなす能力」、「問題解決能力」、「創造性」、「リーダーシップを発揮できる力量」それと「人との交渉能力・折衝能力」の5項目である。これらのうち、「専門的な知識・技能」、「チームの中で仕事を遂行する能力」、「コミュニケーション能力」そして「礼儀・マナー」は、卒業生が短大教育である程度身につけたと感じている項目である。

学科別にみると保育の卒業生は全ての項目について「非常に求められている」と答えている。中でも「専門的な知識・技能」が「非常に求められている」という回答が66.7%であり、33.3%の情報と大きな差が認められる。

この結果は、短大教育である程度身につけたと感じているが、実際の職場ではどの項目の能力についても、それよりはるかに多くのものが求められているということを示している。

現在の仕事が、学歴にどの程度ふさわしいものと感じているかについて、「完全に自分の学歴にふさわしい」と「ふさわしい」の合計が56.3%で、「どちらでもない」が33%である。「完全に自分の学歴にふさわしい」との回答は学科間の差が大きく、保育が47.3%なのに対し情報は16.1%である（図10）。

卒業直後に就いた仕事に対して、最もふさわしい学歴はどれくらいかという質問に対し、全体としては短大卒がもっともふさわしいとした人が67.7%を占める。特に保育は78.6%と高く、情報の48.4%と差がある。それぞれの仕事に最もふさわしい専門分野については、全体としては83.5%が自分の出身学科かそれに近い学科と答えている。学科別には保育の92.8%、情報の69.7%が自分の出身学科かそれに近い学科がふさわしいと答えている（図11）。

現在の仕事をこなすために短大卒業後どのくらいの経験が必要かという質問に対しては、全体では3年との回答が40.8%、5年が25.5%、3ヶ月が15.3%である。学科別では情報では3年が51.5%、3ヶ月が15.2%、5年が9.1%である。保育では3年が36.4%、5年が30.9%、3ヶ月が18.2%である。

3.3.3 質問F：現在の仕事での態度や満足度に関する分析

現在仕事をしている卒業生に、どの程度満足しているかという質問に対して、とても満足しているとほぼ満足していると答えたのは63.4%である。学科別では、情報が57.6%、保育は68.6%である（図12）。

仕事をするうえで何を最も重視しているかの質問に、62.5%の人が短大で得た知識を活用できることを重視していると答えているが、逆に16.3%の人は重視していないと答えている。特に情報でその割合が高い。そのほか、卒業生が仕事をするうえで何を重視してきたかをみると、「新たなことを学ぶ機会」あるいは「社会に役立つ機会」と答えた割合が6割から8割に達し

ており、「高い収入」と答えた割合が50%台であるのに比べ非常に高い。また、「余暇のためのゆとり」が重要と答えた割合も7割を超えている。それ以上に高い割合を占めたのは、「職場の雰囲気の良いさ」で、9割を超える人が「最も重視している」、あるいは「重視している」と答えており、それは学科間で共通している。

それぞれが重視している項目に対して、現在の仕事はどれくらいあてはまっているかの質問には、短大での知識技能については55.3%である。情報はこの項目を保育より重視していなかったにもかかわらず、現在の仕事で生かされていないと感じている人が保育より多い。社会に役立つ仕事は58.0%の人が「ほぼあてはまっている」と答えており、64.2%の人が「新たな事を学ぶ機会となっている」と答えている。それに対して「余暇のためのゆとり」が「ほぼ充足している」と答えた割合は4割であるが、情報の卒業生は35.5%の人が「あてはまらない」と答えており、保育の15.8%に比べ高い。

卒業生が重視している度合いに対し現実とのギャップを感じている項目をあげると、職場の雰囲気、仕事と家庭の両立、高い収入、余暇のためのゆとりの順にギャップを感じている。職場の雰囲気については期待が大きい項目だけに最も現実とのギャップを感じている。

3.3.4 質問G：卒業後の教育訓練に関する分析

短大卒業後、教育訓練を受けた者は情報、保育ともに僅か(8.8%, 6.6%)である。しかし、教育訓練の必要性は感じており、情報では、将来の仕事に必要なことを学ぶに87.9%, 資格を取得することに81.8%, 教養を身につけることに63.6%が必要と答えており、保育は専攻分野を更に学ぶこと、教養を身につけること、将来の仕事に必要なことを学ぶにそれぞれ73.7%, 71.9%, 70.2%とほとんど同率に必要性を感じている。学びたいと考える教育機関は情報、保育ともに専門学校、民間の学習機関、通信教育であり、再教育の場として短大で学ぶことはほとんど希望していない。

前述のとおり、何らかの分野で学びたいと考えている者は多いが、その障害となっていることは、情報、保育ともに、学習のための費用(情報70.6%, 保育70.5%), 学習に必要な時間(情報44.1%, 保育50.8%), 生活を変える決断力(情報41.2%, 保育39.3%)となっている。

短大卒業後卒業生にとって必要なことについては、

離職した場合の再就職支援の必要性が最も多く、情報では67.6%, 保育では85.9%であり、次に職業生活に関して相談にのってくれることでは情報が60.6%, 保育が74.9%であった。

3.4 卒業生の現在に関する分析

3.4.1 質問H：卒業生の現在に関する分析

回答者の性別は女性が92%と圧倒的に多く、生年は1977年, 1983年, 1981年の順に多くなっている。卒業直前は親と同居が70%であるが、現在は59%であり少し減少している。しかし半数以上が同居である。既婚者の子どもは1人が99%である。

居住地について①入学前②在学中③卒業後④現在でみると、何れも山口県が圧倒的に多く、特に②が山口県宇部市であるのは当然と言える。また、①③④については情報は宇部市が、保育の2倍～3倍の割で多い。保育の場合宇部・下関・山口と県内3市に跨っている。

普段の生活の中でこのような行動を積極的にしていますかという質問については、「投票, TV・ラジオによるニュース視聴・新聞購読」を60%以上の人が積極的に行っている。一方活動面では、「ボランティア・自治会活動」は年齢が若いせいと殆どしておらず、「趣味・スポーツ活動」は約3分の1が普通に行っている。

「友人との交際」は75.0%が積極的に行っている。

女性の生き方について、半数以上の人が結婚や出産時に仕事を辞めるが、子供が一定の年齢になったら再び仕事に就くと考えており、また、人生において重視していることは「楽しい毎日」、「家族や身近な人との生活」が約半数を占めている。

3.4.2 質問I：学習経験に関して現在の意識分析

短大で学んだことが役立っている項目としては、現在の職務をこなしていく上で「非常に役立っている」と答えた割合は41.4%で、「役立っている」と答えた割合と合わせると全体で65.5%である。満足のいく仕事を見つける上で「非常に役立った」と答えたのは26.7%で「役立った」と答えた37.1%を合わせても63.8%である。いずれも職業を選択する際に役立ったと答えている割合が高い。学科別にみると保育が情報よりその傾向が強い。

最後に、もう一度18歳になり高校卒業後の進路を考えたとしたら、48.5%が短大へ行き、46.5%が同じ専門を専攻する可能性が非常に高いと答えている。そのなかでも同じ短大に行く可能性が非常に高いと答えた

割合は、33.0%で少し下がる。学科別にみると、保育はもう一度短大に行き(60%)、それも同じ短大(40%)の同じ専攻分野(55%)に行く可能性が非常に高いと答えた。それに対して情報は、4年制大学に進学する可能性が非常に高いと答えた割合が38.7%で、短大に行く可能性が高いと答えた22.6%と合わせると61.3%を占める。専門学校と答えた割合は48.4%である。短大へ、それも同じ短大へ行く可能性が高いと答えた情報の卒業生の割合は、保育の約2分の1である。

4. 情報の卒業生像

短期大学の情報系の教育は、社会的な状況と技術的な進展の影響を強く受ける。社会的な状況は卒業生の出口としての就職先に経済状況が直接反映され、技術的な進展は職場で要求される技術として教育内容に直接反映される。例えば、就職先に関しては、バブル経済期以前の卒業生の就職先とバブル経済期以後では全く異なっている。教育内容に関しても、15年前に登場したインターネットに関わる教育は、それ以前の情報系の教育内容としては存在していなかったが、現在情報系の学科でインターネット技術を教育内容に含まない学科が存在するとすれば、その学科の方が異質である。

調査対象となった1998年卒業の学生は、バブル経済期以後で未だ十分にインターネットビジネスが興隆していない時代であった。その時期の卒業生に対しては、情報処理の基礎、特にソフトウェア構築に重点を置いたカリキュラムを実施していたが、当時はそれがそのまま生かせる社会状況ではなかった。その後学科名を情報計数学科から情報システム学科に変更し、生活情報コースとして医療事務系のコースが加えられた。その後、さらに観光情報コースが加えられ、情報の応用分野への比重が拡大されるにしたがって、情報処理系科目を受講する学生が減少していった。これは1990年代の不況により情報専門技術者に対する社会的要請が減少し、パーソナルコンピュータの普及によるコンピュータ応用技術が求められる社会情勢の変化に学科として追従した結果である。

このように、情報卒業生の卒業年度や履修したコースは、教育内容と卒業後の生活、その結果としての短期大学の評価にどのように関わっているかを知るうえで非常に重要な分析軸になるが、今回の分析では、それらは捨象されている。以下は、これらを前提にした卒業生の姿である。

情報の入学生は、高校を卒業して進学したいという希望を持っていた者が多く、大学や専門学校への進学も考えたが、様々な事情により地元の短期大学を選択した傾向が観られる。進学の際に特定の職業に結びついた資格取得よりも、どちらかという将来への職業選択の範囲を拡げ、しかも社会で求められている分野を学ぶことに重きを置き、情報を選択している傾向が強い。

短期大学に入学してからは、学業にだけ取り組むという姿勢ではなく、友人との交際やアルバイトなど幅広い学生生活を謳歌しようとしている。特にアルバイトは在学中にほとんどの学生が経験している。学費を自己負担していた学生も多く、アルバイトはそのための支援でもあるが、それ以上に事前に社会人としての経験をするための学生の取り組みでもある。情報の学生は、保育に比べ学外実習が少なく保育より多少ゆとりのあるカリキュラムになっていたためと推察できる。このような学生生活を、卒業生たちは、入学前の期待に対してまあまあだったと思っている。

就職活動では、ほとんどの学生が就職課やインターネットを活用して情報を収集し、卒業と同時に正規の職員として仕事に就いている。職種としては、事務系が最も多く、情報専門職は1割を下回っているにもかかわらず、採用された時の最も重要な要素はコンピュータ技術を持っていることだったと捉えている。情報専門職の求人は不況により少ないが、事務職にもパソコン利用技術が必要とされた社会状況が背景にある。

卒業生の6割を超える人が卒業直後に就いた仕事を現在も続けており、1回程度転職をした人を含めると75.7%である。卒業後に就いた職種は非常に多様で職業の選択に幅がある。大学編入という進路を選択した人も、専攻が経営、経済、理学、工学と幅が非常に広い。大学に編入する動機は、職業のためというよりも、より高い技術や技能を学ぶためであり、自分を高めるためと考えている。これは進学も就職もしなかった卒業生が、その理由に他にやりたいことがあったと答えていることと通じるものがある。情報の卒業生は、就職、進学、どちらでもないを問わず、自分を高めるために行動しようとする傾向が強い。

情報の卒業生は、概ね短大で学んだことが現在の仕事に役立ったという肯定的な感想を持っている。特に短大で学んだことのなかでは、「専門的知識・技能」の他に「チームの中で仕事をする」、「コミュニケーション能力」、「礼儀・マナー」などをある程度評価してい

る。しかしながら情報で学んだ「専門的知識・技能」を非常に高くは評価していない。理由は、実際の職場では短大で学んだこと以上の能力を求められていると感じているためと推察される。そのため、現在の仕事に対しては、6割近い人は満足しているにもかかわらず、学歴にふさわしい仕事と思っていない人が多い。

卒業後、特別に教育訓練を受けた人はほとんどいないが、将来の仕事のため、資格取得のため、あるいは教養を身につけるために、その必要性を強く感じている。そのために、専門学校か民間の教育機関に行きたいが、障害も多く実現していない。最も大きな障害は、学習のための費用と時間の捻出で、そのために生活を変えることが生じるがその決心がつかないでいる。また、このようなことについて母校が相談にのってくれることを希望している。今、もう一度高校卒業後の進路が選べるとしたら、やはり進学したい。専門学校や短大、それも同じ短大でも悪くはないが、できれば同じ分野の4年制大学へ進学したいと考えている。

情報の卒業生は、新しい技術や新しい分野を志向する傾向が強く、学生時代も学業だけでなくアルバイトなど多様な経験を積み、そこで学んだことを生かせる仕事をして社会に貢献できることを望んでいる。社会状況、とくに不況の時代に困惑を覚えながらも懸命に様々な職業に挑戦し、新たな学びの場を期待し堅実に働き続けている。このような姿が情報の卒業生像として浮かび上がる。

5. 保育の卒業生像

保育は「養成校」としての様相が強い。「養成校」であることは、そこでの学修がそのまま就業のための資格要件の取得につながることを意味する。入学の目的も、卒業後にある就業のイメージに結びつきやすく、明確に表されやすい。それは、今回の調査結果で入学の動機として「取得したい資格・検定の勉強ができるから」を挙げた者が9割を超えることに表れている。

しかし、文部科学省認可の教職課程（幼稚園教諭免許）であると同時に、厚生労働省指定の保育士養成校でもある保育のカリキュラムは、他の分野の学科に比べて密度が高く、また実習等に費やされる時間も多い。こうしたことも作用してか、調査においても「アルバイト」の経験を示す割合が情報のそれに比して極度に低い。学生生活での最重要課題についての意識においても、また、資格や検定取得の活動を行った割合に関しても同様の結果が見られた。これをしいていうなら

ば、保育の卒業生たちは、大学での学習中心の学生生活を送ってきた「まじめな」学生なのであるといえよう。だが、これが「汎用性」を低くしている可能性を考えられなくもない。

「養成校」であることの特性として見られる結果に、卒業直後の就業のうち、保育関係の専門職への就労がおよそ8割にのぼることもあげられる。これは、専門と社会の連続性が効果的に担保されていると解釈することができるが、先の学生生活の単純さを勧告するならば、職業分野への適応もしくは嗜好における汎用性が低いのではないかという裏の読み方もできなくはない。この点は、今回の分析のみでは「可能性を疑う」という域をでることはできないが、保育専門職にも社会性や人間性ということが強く求められる中であって、今後の検討が待たれるところでもある。

卒業後については、特徴的な点として、初職を続けているとした割合が低いという結果があげられる。これについても保育関連専門職特有の事情が考えられる。他の調査研究においても「保育の現場は5年程度で入れ替わるとよくいわれるが、それを裏付けるような回答」といった記述³⁾が見られるように、比較的短期間の職場である傾向がみられる。この最大の理由としては、ジェンダーの影響が大きく、結婚退職ということが慣行になっている職場であることが挙げられる。だが加えて、近年の卒業後の就業の動向として、臨時や非常勤としての採用が多数を占める現状がある。近年の就業構造の変化により、他分野においても同様の傾向があるとはいえ、保育職におけるその割合は高い。こうした非正規職としての雇用形態はたいていが1年～3年程度の期限付き契約であり、ゆえに、契約満了とともに他に職を求める、といった形のあることも、この結果につながっている可能性がある。今回、この点（卒業直後の雇用形態）は調査項目にはなかったが、「現在の状況」に関しての調査結果では、二つの学科間で正規か非正規かの割合で大きな差がついていることが示されている⁴⁾。保育は非正規職の割合が回答者の3割をこえる結果を示す。

以上のようなことからまとめると、保育の卒業生の代表的なプロフィールとしては、目的意識をしっかりと持って入学し、学生時代はまじめに、短大での学業を中心とした生活を送り、そして卒業後は、フルタイムか否かは別にして、保育に関係する職にある、というものとなる。

なお、最後に蛇足ながら一点指摘しておきたい。描

³⁾選択肢としてパートタイム、契約・派遣、臨時・嘱託というような項目が設定されているが、これらをまとめて「非正規」として表現した。

き出された保育卒業生のプロフィールは、一般的には「理想的な」学生像ともみることができる。だが、青年期におけるオン・キャンパスの副次的効果を考えるなら、この「理想的」に含まれる問題点にも考えを及ぼさずにはいられない。すなわち、青年期の社会化に関わる「あそび」ともいえる部分へのコミットの低さを危惧するような結果であったともいえる。専門職にとって真に重要な社会性や人間性の涵養という観点からは、今少しこうした点へのまなざしがあってよいのかも知れない。

6. まとめ

「短期大学卒業生の学習・仕事・生活に関する調査」の基礎集計に基づき、特に保育と情報の両学科の違いが顕著な点を中心にまとめる。

- (1) 保育の半数は本学だけを目指して入学したのに対し、情報の学生は6割以上が他の4年制大学や専門学校の中から本学を選択して入学している。
- (2) 過ごした学生生活に両学科とも概ね満足しているが、学生生活の様式は異なる。保育の学生はどちらかというと学業に専念して、非常にまじめな学生生活を過ごしているが、情報の学生は、学業、アルバイト、友人との交流など幅広く、典型的な“大学生生活”を過ごしたと感じている。短期大学で受けた教育に対する評価は、情報より保育の方がやや高い。
- (3) 卒業直後、全体で9割の人が就職しており、専門職への就職は保育の方が圧倒的に高い。しかし、卒業直後に就いた仕事をその後も続けているのは、情報が6割以上あるのに対し、保育は4割台に留まっている。保育の卒業生の8割が専門職についており、情報の卒業生に比べ保育の卒業生は希望した職業に就いているが、仕事は持続していない。

7. おわりに

2005年に実施された「短期大学卒業生の学習・仕事・生活に関する調査」の本学に関する概要をまとめ、保育と情報という短期大学にある典型的な専門教育学科を比較検討した。概ね情報より保育の卒業生の方が本学の教育への評価が高いが、継続して就業している点をキャリア形成において優位性があると捉えると、保

育より情報の卒業生の方が成功している率が高いという結果であった。この結論に対する考察には、さらに幅広い情報を基にした議論が必要であるが、現時点で考えられる要因を以下に述べる。

本学教育への満足度が情報より保育が高い要因のひとつは、情報は専門職だけでなく多方面への進路を考慮した幅広い教育を展開しているのに対して、保育は保育士養成校として明確な職業を目指した教育を展開しており、焦点を定めた教育体制が取れることが考えられる。卒業生のキャリア形成における情報と保育の違いについて考えられることは、保育の卒業生は正規職員としての専門職採用が少ない社会状況が影響していることが考えられる。そのほかに、両学科の在学中の生活様式の違いにより身に付けた社会性に違いがあることも考えられる。

本論で示した調査結果から、本学の卒業生はキャリア形成のスタート地点となる本学での教育体制をある程度評価している。同時に、この調査結果からは、必ずしも専門職業的教育だけが短期大学教育の重要な要素ではなく、幅広い教養を身に付けることやアルバイトなどの就労体験をはじめあらゆる生き方の試みができる生活空間として短期大学が重要であることを示している。これは、キャンパスで過ごす学生生活全体が教育であり、その質が重要であることを示唆していると言える。

本論は、調査データが膨大であるため分析としては基礎集計だけに留まっているが、今後は、卒業年度による変化、カリキュラムや教育条件の違いとの関連などを分析することにより、さらに詳細な短期大学とは何かを捉える資料を引き出したい。

参考文献

- 1) 短期大学基準協会調査研究委員会：「短大卒業生の進路・キャリア形成と短大評価」報告書，短期大学基準協会，pp.1-214，2005.
- 2) 伊藤友子，安部恵美子，松永一臣，稲永由紀，吉本圭一：短期大学卒業生の学習経験と初期キャリア，日本教育社会学会第58回大会論文集，pp.337-342，2006.
- 3) 天野珠子，福川須美：卒業後2年目の保育職就職者の実態と意識—本校保育科平成5年度卒業生を対象に—，「駒沢女子短期大学 研究紀要」第29号，pp.7-20，1996.